



TITLE:

日本語連体修飾構文の有機的ネットワーク: 外の関係と転移修飾を中心に

AUTHOR(S):

神澤, 克徳

CITATION:

神澤, 克徳. 日本語連体修飾構文の有機的ネットワーク: 外の関係と転移修飾を中心に. 言語科学論集 2011, 17: 91-111

ISSUE DATE:

2011-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/155037>

RIGHT:

日本語連体修飾構文の有機的ネットワーク

－外の関係と転移修飾を中心に－

かんざわ かつのり
神澤 克徳

京都大学大学院

rnkp43470@gmail.com

1. 序論

日本語の連体修飾に関しては、これまで多くの研究が蓄積されてきている (奥津 1974, 寺村 1975; 1977a; 1977b, 山梨 1995, 松本 1993; 2007, Matsumoto1997, 黒田 1999, 吉川 1989)。しかしながら、それらは離散的に分析されているのが現状である。たとえば、内の関係、外の関係、転移修飾といった現象は、連体修飾構文全体の中では捉えられておらず、そのため、それらがどのような相関関係にあるのかについては自明ではない。そこで、本稿では、包括的なネットワークから、日本語の連体修飾構文を再整理する。そのことによって、各々の構文がその中でいかに位置づけられるか、あるいはそれらの構文がいかなる相関関係をもつかを明らかにする。さらに、日本語には、解釈者の語用論的な推論によって主要部が修飾部の内部に間接的に位置づけられる連体修飾構文なるものが存在する。本稿では、それらの構文には I. イベント-セッティング型連体修飾構文、II. イベント-原因型連体修飾構文、III. イベント-随伴現象型連体修飾構文という 3 タイプが多くみられることを示し、修飾部と主要部の関係は恣意的ではなく、そこにはある程度の規則性がみられることを主張する。

2. 研究対象と先行研究の問題点

2.1 先行研究の概観

日本語の連体修飾に関しては、これまで多くの研究が蓄積されてきている。一般的に受け入れられている日本語連体修飾節の研究には、寺村 (1975; 1977a; 1977b) の「内の関係」と「外の関係」の記述的分類がある。内の関係では、(1) のように、主要部は修飾部に対して格助詞で表される関係を内在しており (寺村 1975)、修飾部は主要部の特定をおこなっている (寺村 1977b)。一方、外の関係では、(2) のように、主要部にどのような格助詞をつけても修飾部のどこにも納めることができず (寺村 1975)、修飾部は主要部名詞句の内容を補完している (寺村 1977b)。

(1) 内の関係

- a. [捕手にボールを投げた]投手 [他動詞 ガ格]
- b. [投手がボールを投げた]捕手 [他動詞 ニ格]
- c. [モグラが出てきた]穴 [他動詞 カラ格]
- d. [父が絵を描いた]ペン [他動詞 デ格]

(2) 外の関係

- a. [北島が試合に勝った]ニュース (堀江・パルデシ 2009: 51)
- b. [さんまを焼く]匂いがする (寺村 1975: 109)
- c. [美奈子を殺した]罰 (寺村 1977b: 33)
- d. [社会的な要求を実質的に反映した洋学の勝利に席をゆずる]結果となった。
(*ibid.*: 18)
- e. [ローマとカルタゴが戦った]歴史 (*ibid.*: 20)
- f. [文子の坐った]うしろの窓には、もみじが青かった。 (*ibid.*: 27)

次に、形容詞、形容動詞、自動詞が修飾部にくる連体修飾についてみていく。(3) の通常の修飾では、修飾部が主要部の属性を描写している。

(3) 通常の修飾

- a. [高い]木に登った。
- b. [新しい]ノートを使う。

一方、修飾部が統語的には主要部を修飾しているものの、意味的には他の要素の描写をしている (4) のタイプの修飾がある (山梨 1995)。これらは、一般に転移修飾とよばれる。

(4) 転移修飾

- a. 男は[疲れた]夜道をとぼとぼ歩いていった。 (山梨 1995: 179)
- b. 女はじつと[かなしい]空を見上げた。 (*ibid.*: 179)
- c. 和服に外套の駅長は[寒い]立話を切り上げたらしく、もう後姿を見せながら「それじゃまあ大事にいらっしやい。」 (川端康成「雪国」)
- d. 春のやよいのこのよき日[なによりうれしい]ひな祭り (サトウハチロー「うれしいひな祭り」)

2.2 先行研究の問題点と本研究のアプローチ

2.2.1 既存の分類法の限界

寺村 (1975; 1977a; 1977b) は内の関係と外の関係をつくその連体修飾節が一文に展開できるか否か>という基準で分類している。たとえば、(5a) は、一見修飾部と主要部の間に項関係が成立しない外の関係にみえるが、(5b) のように一文に展開できることから、内の関係に分類されるとしている。

- (5) a. [頭のよくなる]本 (寺村 1977a: 34)
- b. <この本を読めば頭がよくなる>

しかしながら、寺村が外の関係に分類している (6a, 7a) も、(6b, 7b) のように一文に展開できてしまう。(6a, 7a) が内の関係とも外の関係とも解釈できてしまうこの分類法では、(5a) を含めたこれらの例が連体修飾構文全体の中のどこに位置づけられ、どの構文と関連性をもつのかといったことが不明瞭である。

- (6) a. [さんまを焼く]匂いがする (寺村 1975: 109)
- b. <さんまを焼くときに匂いが出る>
- (7) a. [美奈子を殺した]罰 (寺村 1977b: 33)
- b. <美奈子を殺したために罰を受ける>

また、転移修飾の位置づけについても疑問が残る。一見網羅的に連体修飾構文を扱っている寺村 (1975; 1977a; 1977b) などの研究においても、転移修飾現象は扱われていない。したがって、「女はじっと[かなしい]空を見上げた。」という一文において「かなしい」と「空」の関係が、内の関係か外の関係かという疑問に対する答えは自明ではない。

2.2.2 連体修飾構文としての包括的視点

本研究では、(8) の観点から、日本語の連体修飾を分析する。このことで、先行研究では明らかにされてこなかった日本語の連体修飾構文間の関連性が明確になる。具体的には、2.2.1 節で扱った寺村 (1975; 1977a; 1977b) で内の関係とも外の関係とも分類できる (5a, 6a, 7a) や、転移修飾現象を日本語の連体修飾構文のネットワークの中に適切に位置づけることが可能となる。

- (8) a. 形容詞 (e.g. 高い、楽しい)、形容動詞 (e.g. 退屈な)、自動詞 (e.g. 疲れた)、
節が修飾部に現れる連体修飾を「連体修飾構文」として一括的に扱う。
- b. 寺村 (1975; 1977a; 1977b) でみられる主要部と修飾部に項関係がみられる否
か、あるいはその連体修飾節が一文に展開できるか否か、といった統語的側
面のみからの連体修飾構文の分類ではなく、その解釈の場面における語用論
的な推論の喚起や文脈依存的な情報の補足、あるいは談話的要因からの項の
ギャップ化など、談話・語用論的要因を取り入れた連体修飾構文の分類をお
こなう。
- c. それによって、通常の形容詞、形容動詞、自動詞による修飾と転移修飾、あ
るいは内の関係と縮約節といった、これまでは離散的に扱われてきた連体修
飾構文を有機的なネットワークとして規定する。

連体修飾構文へのこのようなアプローチは、Comrie (1981) の関係節へのアプローチの
理論的背景ともある程度の相関性がある。具体的には、Comrie は、主要部と制限節から
なり、制限節が主要部の説明をしているものはすべて関係節構造であるとし、関係節認定
の必要十分的な定義があるというよりも、制限的關係節をプロトタイプとしたネットワー
クから関係節を特徴づけている。

3. 日本語連体修飾構文の有機的ネットワーク¹

3.1 日本語連体修飾構文の相関的分布

3.1 節では、日本語の連体修飾の意味解釈にかかわるパラメータを設定し、これらのパ
ラメータにもとづくと、それぞれの連体修飾構文の相関的な分布が明らかになるというこ
とを示す。設定したパラメータは、具体的には以下の2つである。

- (9) (i) 修飾部の文法構造の内部への主要部の位置づけが可能か、否か
(ii) 談話上の理由から、項のギャップ化が生じているか、否か

日本語の連体修飾において修飾部に本来存在すべき項が存在しない場合、その理由として、
2つの可能性が考えられる。一方は、ある項が主要部として実現されるために、それが修
飾部内では実現されていないという、連体修飾に特化した可能性である。もう一方は、修
飾部の項がギャップ化しているという可能性であり、これは、日本語では談話上の理由か
ら項のギャップ化を許す場合がある、という特徴に関わる (久野 1978)。後者によって生

じる項のギャップ化は連体修飾に特化したものではない。この 2 つの可能性を区別しておくことは意味解釈の観点から非常に重要である。解釈者が日本語の連体修飾の意味を正しく解釈するためには、その主要部が修飾部の内部に項関係として位置づけられるかどうかを判断するという、前者の可能性に対応したプロセスと、談話的な項のギャップ化がみられるか否かを判断するという、後者の可能性に対応したプロセスという二重のプロセスが必要になるからである。本研究では、このような意味解釈の観点から、日本語連体修飾を分析する。(9) のパラメータをもとに日本語の連体修飾構文を観察すると、それらは表 1 のような相関的な分布関係にあることがわかる。次節ではそれぞれについて、具体的にみていく。

表 1 日本語連体修飾のネットワーク

		談話的な項のギャップ化	
		なし	あり
修飾部の内部への 主要部の位置づけ	項関係として位置づけられる	A-1	A-2
	解釈者の推論によって間接的に位置づけられる	B-1	B-2
	位置づけられない	C-1	C-2

(A-1) 主要部が修飾部の内部に項関係として位置づけられる、かつ談話的な項のギャップ化がみられないタイプ

このタイプでは、談話的な項のギャップ化はみられない。また、主要部は修飾部の内部に項関係として位置づけられる。

(10) 形容詞

- a. クリスマスに一人で過ごすなんて[寂しい]人だ。

(11) 形容動詞

- a. 10 年ぶりに[盛大な]同窓会が開催された。
b. このクラスには[無気力な]生徒が数人いる。

(12) 自動詞

- a. [壊れた]花瓶をかき集める。
b. [歩いている]人に聞いてみよう。

(13) 他動詞

- a. [捕手にボールを投げた]投手 [ガ格]
- b. [投手がボールを投げた]捕手 [ニ格]
- c. [モグラが出てきた]穴 [カラ格]
- d. [父が絵を描いた]ペン [デ格]

一項述語である形容詞、形容動詞、自動詞が修飾部にきている (10-12) では、それらの主要部がその項としてはたらいっている。また、他動詞を含んだ節が修飾部にきている (13) では、それらの主要部が、修飾部で実現されていない他動詞の項に対応する。このタイプを、プロトタイプのな連体修飾構文とする。

(A-2) 主要部が修飾部の内部に項関係として位置づけられる、かつ談話的な項のギャップ化がみられるタイプ

このタイプは、項のギャップ化が生じているという点で、(A-1) とは異なる。この場合、解釈者によって項のギャップが補われなければならない。

(14) 他動詞

- a. 私はいつも魚を食べるが、[昨日食べた]魚は非常においしかった。[ヲ格]
- b. [ボールを投げる]人を探しています。[ガ格／ニ格]
- c. [花束をあげた]人は美人だった。[ガ格／ニ格]

たとえば (14a) では、修飾部のギャップ化しているガ格とヲ格が特定される必要がある。そのために、まずその主要部が修飾部の内部に項関係として位置づけられるかどうか判断される。この場合、主要部の「魚」には修飾部のガ格として項関係が与えられる可能性と、ヲ格として項関係が与えられる可能性が存在する。しかし、ここでは、談話の流れ（具体的には複文の前部である「私はいつも魚を食べる」という要素）からガ格解釈の可能性が抑制され、ヲ格として修飾部に位置づけられる³。同時並列的に、ギャップ化している「食べた」のガ格が、談話の流れと＜食事＞というイベントに関わるフレーム的知識から「私」として特定されることで、この連体修飾構文の適切な理解が達成される。

(15) 受け手解釈

[ϕ ガボールを投げる]人を探しています。 [他動詞 ニ格]

(16) 投げ手解釈

[ϕ ニボールを投げる]人を探しています。 [他動詞 ガ格]

また、(14b,c) は談話からの項のギャップの補い方によって、その解釈が異なってくる (c.f. 松本 1993)。たとえば、(14b) において、(15) のようにガ格を補うと、主要部はニ格として修飾部に位置づけられ、この場合の連体修飾全体の解釈は「受け手解釈」となる。一方、(16) のようにニ格を補うと、主要部はガ格として修飾部に位置づけられ、この場合の連体修飾全体の解釈は「投げ手解釈」となる。また、一項述語である形容詞、形容動詞、自動詞が修飾部にきている連体修飾は、このタイプにはみられない。

以上、(A-1)、(A-2) は、寺村 (1975; 1977a; 1977b) で内の関係とされている連体修飾に対応する。

(B-1) 主要部が修飾部の内部に解釈者の推論によって間接的に位置づけられる、かつ談話的な項のギャップ化がみられないタイプ

これまでみてきた (A-1)、(A-2) では、主要部が項関係として修飾部の内部に位置づけられ、そこでの統語的・意味的關係によって、その連体修飾構文の解釈が可能となっている。一方、このタイプの連体修飾では、主要部と修飾部にはそのような項関係はみられず、解釈者の語用論的な推論によって、主要部が修飾部の内部に間接的に位置づけられる。

(17) 形容詞

- a. [楽しい]旅に出かけませんか。
- b. 彼は[悲しい]海に別れを告げた。

(18) 形容動詞

- a. [憂鬱な]梅雨にはうんざりだ。
- b. [退屈な]授業が終わる。

(19) 他動詞

- a. [母がトーストをこがした]煙がまだ部屋に残っている。
- b. [彼女が慌てて視線を上げる]一瞬のまばたきを見た。

たとえば、(17b) をみってみる。「悲しい X」の X には、通常はその状態にある主体がくるはずであるが、実際にはそのような項関係は成立しておらず、「海」という名詞がきている。したがって、解釈者の語用論的な推論が関与されない限り、この連体修飾構文は適切に理解されない。ここでは、＜誰かが海を見ている＞というイベントが想起されることで、そのフレーム的知識から、参与者である「主体」とその対象である「海」が関連づけられ、＜海を見ている主体が、悲しい気持ちである＞という推論が可能になる。主体の同定は、同一文の「彼」からおこなわれ、適切な解釈が完了する。このように、解釈者によって想起された「イベント」のフレーム的知識を介した、主要部の修飾部への間接的な位置づけが、このタイプの連体修飾構文にはみられる。一般的に転移修飾とよばれる現象や、寺村(1975; 1977a; 1977b) で外の関係と呼ばれていた現象の一部がこのタイプに属する。また、彼の分類法では内の関係とも外の関係とも解釈できた (5a) も、このタイプに位置づけられる。

(5) a. [頭のよくなる]本 (寺村 1977a: 34) (再掲)

(B-2) 主要部が修飾部の内部に解釈者の推論によって間接的に位置づけられる、かつ談話的な項のギャップ化がみられるタイプ

このタイプは、談話的な項のギャップ化が生じているという点で (B-1) とは異なる。たとえば (21b) では、ガ格のギャップ化が生じている。そのギャップを補うために、まず主要部が修飾部の内部にガ格として位置づけられるかどうか判断される。しかしながら、主要部の「家庭教師」はそのフレーム知識から、通常は＜高校入試に絶対受かる＞というイベントの主体ではないと判断される。したがって、この主要部はガ格として修飾部に位置づけることができない。よって、ギャップ化している修飾部のガ格は、談話の流れと＜高校入試に絶対受かる＞というイベントに関わるフレーム的知識から補われる必要がある。ただし、この例の場合は、その項にふさわしい要素は同一文中には存在しない。その場合の項の可能な探索領域として考えられる範囲には、その文を含む談話や、発話者あるいは聞き手という談話依存的な情報が含まれる⁴。その上で、(B-1) でみたようなプロセスが生じる⁵。そうすることで、主要部の「家庭教師」が修飾部のイベントの中に関連づけられ、＜その家庭教師の指導を受けることで高校入試に絶対受かる＞という語用論的推論にもとづいた意味解釈が可能になる。

(20) 自動詞

- a. [φガ喜ぶ]仕草がかわいい。
- b. こんなにも[φガ泣ける]映画を観たのは初めてだ。
- c. 私がこんなにも[φガ息が上がる]山を登ったのは久しぶりだ。

(21) 他動詞

- a. この頃[φガトイレに行けない]コマーシャルが多くて困る。(松本 1993: 102)
- b. [φガ高校入試に絶対受かる]家庭教師を探しています。(ibid.: 105)
- c. 圭三は胸騒ぎがした。[φガ異常なものを見つけた]動揺がしばらく続いた。(寺村 1977b: 32)
- d. [彼がφヲ殴った]原因は意見のもつれだった。
- e. [φガさんまを焼く]匂いがする。(寺村 1975: 109)
- f. [φガ美奈子を殺した]罰 (寺村 1977b: 33)

このタイプの連体修飾構文には、(A-2) でみたような、項のギャップの補い方によって、解釈が複数生じる例は存在しない。なぜなら、(A-2) でみた解釈の多様性は、主要部が修飾部に項として直接位置づけられることを前提としているからである。しかしながらここでの主要部は、修飾部に統語的、意味的に直接位置づけられない。それはすなわち、それが修飾部の他動詞の項として実現される可能性がないことを意味する。また、形容詞、形容動詞が修飾部にきている連体修飾は、このタイプにはみられない。

寺村 (1975; 1977a; 1977b) で外の関係と呼ばれていた現象の一部がこのタイプに属する。また、彼の分類法では内の関係とも外の関係とも解釈できた (6a, 7a) は、このタイプに位置づけられる。

- (6) a. [さんまを焼く]匂いがする (寺村 1975: 109) (再掲)
- (7) a. [美奈子を殺した]罰 (寺村 1977b: 33) (再掲)

(C-1) 主要部が修飾部の内部に項関係として位置づけられない、かつ談話的な項のギャップ化がみられないタイプ

このタイプは (A-1), (B-1) と同様に、談話的な要因による項のギャップ化はみられない。しかし (A-1) とは異なり、主要部が修飾部の内部に項関係として位置づけられない。また (B-1) のように解釈者によって想起されたイベントのフレーム的知識などにもとづいた語用論的な推論を介した、主要部の修飾部への間接的な位置づけも不可能である。

(22) 自動詞

- a. [地球が回る]事実は幼稚園の時に知った。
- b. [雨が降る]気配がする。
- c. [ローマとカルタゴが戦った]歴史 (寺村 1977b: 20)
- d. [文子の坐った]うしろの窓には、もみじが青かった。 (*ibid.*: 27)

(23) 他動詞

[大物政治家が逮捕された]ニュースが世間を賑わせている。

たとえば (22b) では、いかなる推論をおこなっても、主要部の「気配」を修飾部にうまく位置づけることができない。この場合、主要部にはその内容の精緻化を必要とする抽象的で、他の要素に依存的な名詞句がくる場合が多く、それを精緻化するはたらきとして修飾部が位置づけられる。寺村 (1975; 1977a; 1977b) で外の関係と呼ばれていた現象の一部はこのタイプに属する。また、形容詞、形容動詞が修飾部にきている連体修飾は、このタイプにはみられない。

(C-2) 主要部が修飾部の内部に項関係として位置づけられない、かつ談話的な項のギャップ化がみられるタイプ

このタイプは項のギャップ化が生じているという点で (C-1) とは異なる。この場合、解釈者によって項のギャップが補われなければならない。たとえば (25a) では、ガ格が特定される必要がある。可能性として、主要部をガ格として修飾部に位置づけることもできるが、相撲の試合に勝つ主体として「余韻」がくることは、相撲の試合のフレーム的知識から抑制される。そこで、談話の流れから、ギャップ化された修飾部のガ格を補う必要があり、この場合は、前文の「白鵬」が適切な項として選ばれる。寺村 (1975; 1977a; 1977b)

で外の関係と呼ばれていた現象の一部はこのタイプに属する。また、形容詞、形容動詞が修飾部にきている連体修飾は、このタイプにはみられない。

(24) 自動詞

- a. 長らくの協議の末、[φガ閉店する]結果となった。

(25) 他動詞

- a. 白鵬は強かった。国技館は[φガ琴欧洲に勝った]余韻で包まれていた。
b. [通り魔がφヲ襲った]事件から10年が経つ。

3.2 語用論的推論と連体修飾構文のパターン

3.2.1 概要

3.1 節では、(9) のパラメータを設定することで、日本語の連体修飾構文がネットワーク的に捉えられるということを主張した。

- (9) (i) 修飾部の文法構造の内部への主要部の位置づけが可能か、否か
(ii) 談話上の理由から、項のギャップ化が生じているか、否か

(再掲)

このようなネットワークから、個々の連体修飾現象を位置づける意義は二点ある。一点目は、これまでは形容詞 (e.g. 高い、楽しい)、形容動詞 (e.g. 退屈な)、自動詞 (e.g. 疲れた)、節などの修飾部の要素によって離散的に扱われてきた連体修飾が、実際は相互に密接に関連したふるまいをみせていることを示すことができる点である。二点目は、寺村 (1975; 1977a; 1977b) での内の関係とも外の関係とも分類できる例や、転移修飾現象を、それらと関連する構文の中で適切に位置づけられるだけでなく、それらがいかに類似しており、いかに異なっているかを明らかにすることができる点である。

ここで、3.1 節で (B-1), (B-2) に分類された (26-29) の例、すなわち、主要部と修飾部に統語的な項関係はみられないが、解釈者の語用論的な推論によって、主要部が修飾部の内部に間接的に位置づけられる例について、さらなる精緻化が必要である。語用論的なレベルで主要部が修飾部に結びつけられる場合、その結びつきは多様で、一見予測不可能のように思われるが、主要部と修飾部の意味関係には多く現れるある一定のパターンが認められるからである。次節では、このことについて検討をおこなう。

(26) 形容詞

[楽しい]旅に出かけませんか。

(27) 形容動詞

[憂鬱な]梅雨にはうんざりだ。

(28) 自動詞

a. 私がこんなにも[息が上がる]山を登ったのは久しぶりだ。

b. [φガ喜ぶ]仕草がかわいい。

(29) 他動詞

a. [母がトーストをこがした]煙がまだ部屋に残っている。

b. この頃[φガトイレに行けない]コマーシャルが多くて困る。(松本 1993: 102)

3.2.2 分析

本節では、解釈者の語用論的な推論によって主要部が修飾部の内部に間接的に位置づけられる連体修飾構文を、(30) の意味的パラメータによってタイプ分けする。

- (30) (i) 主要部が修飾部で表されるイベントのセッティングとして解釈できるか、否か
(ii) 主要部が修飾部のイベントの原因として解釈できるか、否か

(i) は主に主要部と修飾部の空間、時間関係に関するパラメータ、(ii) は主に主要部と修飾部の因果関係に関するパラメータである。これらのパラメータから、分析をおこなったところ、これらの構文では、I. イベント-セッティング型連体修飾構文、II. イベント-原因型連体修飾構文、III. イベント-随伴現象型連体修飾構文という 3 タイプが多くみられることがわかった。以下ではそれぞれについて具体的に分析していく。

I. イベント-セッティング型連体修飾構文

まず、「イベント-セッティング型連体修飾構文」についてみていく。このタイプの連体修飾構文の主要部は、修飾部で表されるイベントのセッティングとして解釈でき ((30i) のパラメータ)、修飾部のイベントの原因として解釈できない ((30ii) のパラメータ)。

(31) 時間的、自動詞

僕はテスト前で[φ ガ眠れない]毎日をすごす。

(32) 時間的、他動詞

[φ ガ会社を辞めた]過去はもう忘れましょう。

(33) 空間的、形容詞

a. 女はじつと[かなしい]空を見上げた。(山梨 1995: 179)

b. 彼は[悲しい]海に別れを告げた。

(34) 空間的、自動詞

男は[疲れた]夜道をとぼとぼ歩いていった。(山梨 1995: 179)

このタイプの連体修飾構文にみられるイベントのセッティングとしては、(31, 32) の「毎日」や「過去」のような、時間的要素が前景化されている時間的セッティングと、(33, 34) の「空」や「海」や「夜道」のような、空間的要素が前景化されている空間的セッティングがある。ただし、(33, 34) のような空間的セッティングを主要部にもつ事例は、(35) のように、文脈によっては主要部が空間的セッティングとしても、修飾部のイベントの原因としても解釈される可能性がある。したがって、ある要素をセッティングとしての認定することには、主要部の語彙的意味だけでなく、語用論的な要素が関わっているといえる。またこの事例は、I のタイプと次に述べる II のタイプとの境界が必ずしも明確に定まらないことを示す。

(35) あれは彼の父が死んだ海だ。彼は[悲しい]海に別れを告げた。

Langacker (1993) の参照点構造という観点から考えてみると、このタイプの連体修飾は、修飾部の精緻化領域の精緻化に関連して、主要部に「活性化領域とプロファイルのずれ」が生じている事例として捉え直すことができる⁶。この連体修飾の主要部においてプロファイルされているのは、時間的、空間的なセッティングである。しかし、修飾部との結合に際して、修飾部の精緻化領域を精緻化しているのはその時間的、空間的なセッティングに位置づけられるイベントのトラジェクターであり、すなわち活性化領域はそのトラジェクターである。たとえば、(31) では、「毎日」という時間的なセッティングがプロファイルされているが、活性化領域はそこに位置づけられるイベントのトラジェクターである。それは談話的の流れから「僕」であると決定され、これが修飾部と結合される。

II. イベント-原因型連体修飾構文

次に、「イベント-原因型連体修飾構文」についてみていく。このタイプの連体修飾構文の主要部は、修飾部で表されるイベントのセッティングとして解釈できないが ((30i) のパラメータ)、修飾部のイベントの (直接的/間接的) な原因として解釈することが可能である ((30ii) のパラメータ)。

(36) 形容詞

- a. 和服に外套の駅長は[寒い]立話を切り上げたいらしく、もう後姿を見せながら「それじゃまあ大事にいらっしゃい。」 (川端康成「雪国」)
- b. 春のやよいのこのよき日[なによりうれしい]ひな祭り (サトウハチロー「うれしいひな祭り」)
- c. [楽しい]旅に出かけませんか。

(37) 形容動詞

[退屈な]授業が終わる。

たとえば、(36a) の主要部である「立話」は、修飾部の<誰かが寒いとを感じる>というイベントの原因として解釈することが可能である (立話が原因となって、誰かが寒いと感じる)。この場合、修飾部のイベントの経験者は同一文中から「駅長」であると同定できる。(36b, c) でも同様のプロセスが関与している。

(38) 自動詞

- a. 私がこんなにも[φガ息が上がる]山を登ったのは久しぶりだ。
- b. こんなにも[φガ泣ける]映画を観たのは初めてだ。

(39) 他動詞

- a. この頃[φガトイレに行けない]コマーシャルが多くて困る。 (松本 1993: 102)
- b. [φガ高校入試に絶対受かる]家庭教師を探しています。 (*ibid.*: 105)

一方、(38, 39) の主要部名詞となっている要素は、「立話」のようにイベントそれ自体を表すのではなく、その修飾部で表されるイベントの参加者を指示している。このタイプの連体修飾を適切に解釈するためには、解釈者のフレーム的知識によって、そのイベントの

参加者から、イベント全体が語用論的に推論されなければならない。たとえば、(39a) は、主要部の「コマーシャル」から、＜誰かがコマーシャルを見る＞というイベントが推論される。このとき、主要部の「コマーシャル」は、そのイベントの対象（ヲ格）として理解される。このイベントが原因となって、修飾部で表されるイベントが引き起こされていると解釈できる。この場合、修飾部のガ格は談話の中から補われる必要がある。このタイプに属する連体修飾の主要部と修飾部の時間関係をみると、主要部が表すイベントまたは主要部から推論されるイベントは、修飾部のイベントに対して、時間的に同時か、あるいは先行する⁷。

このタイプでも、I のタイプと同様に、修飾部の精緻化領域の精緻化に関連して、主要部に「活性化領域とプロフィールのずれ」が生じている。(36) の主要部では、名詞で表されるイベントがプロフィールされている。しかし、修飾部との結合に際して、修飾部の精緻化領域を精緻化しているのはそのイベントの参加者である。したがって、活性化領域はその参加者である。たとえば、(36a) では、「立話」がプロフィール、「立話」というイベントの参加者である主体（トラジェクター）が活性化領域となっている。(36b, c) も同様のプロセスが関与している。一方、(38, 39) で主要部になっているのは、あるイベントの参加者（トラジェクター (39b)、ランドマーク (38a, b; 39a)）であり、これらはプロフィールされている。しかし、修飾部との結合に際して修飾部の精緻化領域を精緻化しているのは、同一のイベントの別の参加者であり、それが活性化領域となっている。たとえば、(39a) では、＜誰かがコマーシャルを見る＞というイベントのランドマークである「コマーシャル」がプロフィールされているが、実際に修飾部の精緻化領域を精緻化しているのは、＜誰かがコマーシャルを見る＞というイベントの別の参加者である主体（トラジェクター）である。

III. イベント-随伴現象型連体修飾構文

最後に、主要部が修飾部で表されるイベントのセッティングとしては解釈できず（(30i) のパラメータ）、イベントの原因として解釈されない（(30ii) のパラメータ）事例はどのように扱えばよいのだろうか。これらの事例における主要部と修飾部の関係をみると、次の二点の特徴をもつ事例が多くみられることがわかる。一点目の特徴として、主要部は修飾部のイベントに対して時間的に同時か、あるいは後続するという時間関係をもつ。二点目の特徴として、解釈者のフレーム的知識から修飾部のイベントに随伴した現象である

と解釈される名詞が主要部にきている。よって、このタイプの連体修飾構文を「イベント-随伴現象型連体修飾構文」として位置づける。

(40) 自動詞

[φガ喜ぶ]仕草がかわいい。

(41) 他動詞

- a. [母がトーストをこがした]煙がまだ部屋に残っている。
- b. 圭三は胸騒ぎがした。[φガ異常なものを見つけた]動揺がしばらく続いた。
(寺村 1977b: 32)
- c. [φガさんまを焼く]匂いがする。 (寺村 1975: 109)
- d. [φガ美奈子を殺した]罰 (寺村 1977b: 33)

たとえば、(40) の主要部「仕草」は、<φガ喜ぶ>という修飾部のイベントに随伴して生じていると解釈できる。この場合の主要部は、修飾部のイベントに対して時間的に同時である。また、(41b) の主要部「煙」は<トーストをこがす>という修飾部のイベントに随伴して生じていると解釈できる。また、「煙」は<トーストをこがす>というイベントに同時か、あるいはイベント終了後にも視覚や嗅覚によって知覚することが可能である。形容詞、形容動詞が修飾部にくる連体修飾はこのタイプにはみられない。

3.3 まとめ

3.1 節では、(9) のパラメータを用いて、これまでは離散的に分類されてきた日本語の連体修飾構文が有機的なネットワークとして捉えられることを主張し、内の関係とも外の関係とも分類できる例や転移修飾現象が、連体修飾構文のネットワークの中で適切に位置づけられることを明らかにした。

- (9) (i) 修飾部の文法構造の内部への主要部の位置づけが可能か、否か
- (ii) 談話上の理由からの項のギャップ化が生じているか、否か

(再掲)

また、3.2 節では、(30) のパラメータを用いて、解釈者の語用論的な推論によって主要部が修飾部の内部に間接的に位置づけられる連体修飾構文にも、I. イベント-セッティング

型連体修飾構文、II. イベント-原因型連体修飾構文、III. イベント-随伴現象型連体修飾構文という 3 タイプが多くみられることを示した。

- (30) (i) 主要部が修飾部で表されるイベントのセッティングとして解釈できるか、否か
- (ii) ((i) で主要部のセッティング解釈が不可能な事例について) 主要部が修飾部のイベントの原因として解釈できるか、否か

(再掲)

これらの分析を統合し、表 1 で示した連体修飾構文のネットワークを改編すると、表 2 になる⁸。

表 2 下位のタイプ分けを加えた日本語連体修飾のネットワーク

		談話的な項のギャップ化	
		なし	あり
修飾部の内部への 主要部の位置づけ	項関係として位置づけられる	(10-13)	(14)
	解釈者の推論によって間接的に位置づけられる		
	イベント-セッティング型連体修飾構文	(33, 34)	(31, 32)
	イベント-原因型連体修飾構文	(36, 37)	(38, 39)
	イベント-随伴現象型連体修飾構文	(41a)	(40, 41b-d)
	位置づけられない	(22, 23)	(24, 25)

4. さらなる問題

本稿で扱うことができなかった問題に以下の二点がある。

まず、「主要部内在型関係節」とよばれる現象が、本研究で提示した日本語の連体修飾構文にいかにして位置づけることが可能であるかという問題である。主要部内在型関係節である (42) の修飾部「駅で酔っぱらいが騒いでいた」は節の形をとりながら主文の主語の位置を占めているようにみえる。しかし、意味上はその節に含まれる名詞が主文の主語の役割を担っている (黒田 1999)。主文の主語のほかに、目的語、補語になる事例も存在する。主要部と制限節からなり、制限節が主要部の説明をしているという点で連体修飾と

共通の特徴を有しているといえるが、これを本稿で論じた連体修飾構文のネットワークにいかにして位置づけるかは今後の課題である。

- (42) [駅で酔っぱらいが騒いでいた]のが警官に捕まった。(黒田 1999:27)

また、主要部内在型関係節は中古などでみられるいわゆる同格表現と類似していることを示しておきたい。すなわち、(43)の修飾部「唐鏡のすこしくらき」は節の形をとりながら主文の目的語の位置を占めているようにみえる。しかし、意味上はその節に含まれる名詞が主文の目的語の役割を担っているという点で主要部内在型関係節と同一の構造をもっている。ただし、いわゆる同格表現の場合は主要部のスロットにはゼロ形がきいている。

- (43) [唐鏡のすこしくらき]見たる。(『枕草子』第二十九段)

二点目に、2.2.1 節において、寺村 (1975; 1977a; 1977b) の内の関係、外の関係という二分では適切に捉えられない事例が存在することを指摘したが、次の点からもこの二分法の妥当性に関しては疑問が残る。まず、(44a) は、デ格が主要部になっている (44b) とも解釈されるし、修飾部と主要部で項関係が存在しない (44c) とも解釈される。寺村の分類に従うならば、前者であれば内の関係、後者であれば外の関係ということになるが、どちらかを決定する積極的な要因はない。

- (44) a. [主人公が馬に乗って疾走する]シーン
 b. そのシーンで主人公が馬に乗って疾走する。
 c. 主人公が馬に乗って疾走するというシーン

また、(45a) と (46a) は一見同じ構造をもつが、「道」を主要部とする (45a) には (45b) のように修飾部とヲ格の項関係が存在することが明らかである。しかし、(46b) のように、(46a) の「距離」をヲ格として解釈することには若干の違和感が感じられる。すなわち、(45a) と同様に (46a) を内の関係に分類することが可能なのか、仮に不可能であるとしたら、この「距離」はどのように分析すればいいのか、という疑問が残る。

- (45) a. [ジョーがラストシーンで歩いた]道
 b. ジョーがラストシーンでその道を歩く。

型連体修飾構文、II. イベント-原因型連体修飾構文、III. イベント-随伴現象型連体修飾構文という 3 タイプが多くみられることを示した。

- (30) (i) 主要部が修飾部で表されるイベントのセッティングとして解釈できるか、否か
- (ii) ((i) で主要部のセッティング解釈が不可能な事例について) 主要部が修飾部のイベントの原因として解釈できるか、否か

(再掲)

これらの分析を統合し、表 1 で示した連体修飾構文のネットワークを改編すると、表 2 になる⁸。

表 2 下位のタイプ分けを加えた日本語連体修飾のネットワーク

		談話的な項のギャップ化	
		なし	あり
修飾部の内部への 主要部の位置づけ	項関係として位置づけられる	(10-13)	(14)
	解釈者の推論によって間接的に位置づけられる		
	イベント-セッティング型連体修飾構文	(33, 34)	(31, 32)
	イベント-原因型連体修飾構文	(36, 37)	(38, 39)
	イベント-随伴現象型連体修飾構文	(41a)	(40, 41b-d)
	位置づけられない	(22, 23)	(24, 25)

4. さらなる問題

本稿で扱うことができなかった問題に以下の二点がある。

まず、「主要部内在型関係節」とよばれる現象が、本研究で提示した日本語の連体修飾構文にいかにして位置づけることが可能であるかという問題である。主要部内在型関係節である (42) の修飾部「駅で酔っぱらいが騒いでいた」は節の形をとりながら主文の主語の位置を占めているようにみえる。しかし、意味上はその節に含まれる名詞が主文の主語の役割を担っている (黒田 1999)。主文の主語のほかに、目的語、補語になる事例も存在する。主要部と制限節からなり、制限節が主要部の説明をしているという点で連体修飾と

共通の特徴を有しているといえるが、これを本稿で論じた連体修飾構文のネットワークにいかにして位置づけるかは今後の課題である。

(42) [駅で酔っぱらいが騒いでいた]のが警官に捕まった。(黒田 1999:27)

また、主要部内在型関係節は中古などでみられるいわゆる同格表現と類似していることを示しておきたい。すなわち、(43) の修飾部「唐鏡のすこしくらき」は節の形をとりながら主文の目的語の位置を占めているようにみえる。しかし、意味上はその節に含まれる名詞が主文の目的語の役割を担っているという点で主要部内在型関係節と同一の構造をもっている。ただし、いわゆる同格表現の場合は主要部のスロットにはゼロ形がきいている。

(43) [唐鏡のすこしくらき]見たる。(『枕草子』第二十九段)

二点目に、2.2.1 節において、寺村 (1975; 1977a; 1977b) の内の関係、外の関係という二分法では適切に捉えられない事例が存在することを指摘したが、次の点からもこの二分法の妥当性に関しては疑問が残る。まず、(44a) は、デ格が主要部になっている (44b) とも解釈されるし、修飾部と主要部で項関係が存在しない (44c) とも解釈される。寺村の分類に従うならば、前者であれば内の関係、後者であれば外の関係ということになるが、どちらかを決定する積極的な要因はない。

- (44) a. [主人公が馬に乗って疾走する]シーン
 b. そのシーンで主人公が馬に乗って疾走する。
 c. 主人公が馬に乗って疾走するというシーン

また、(45a) と (46a) は一見同じ構造をもつが、「道」を主要部とする (45a) には (45b) のように修飾部とヲ格の項関係が存在することが明らかである。しかし、(46b) のように、(46a) の「距離」をヲ格として解釈することには若干の違和感が感じられる。すなわち、(45a) と同様に (46a) を内の関係に分類することが可能なのか、仮に不可能であるとしたら、この「距離」はどのように分析すればいいのか、という疑問が残る。

- (45) a. [ジョーがラストシーンで歩いた]道
 b. ジョーがラストシーンでその道を歩く。

- (46) a. [ジョーがラストシーンで歩いた]距離
 b. ?ジョーがラストシーンでその距離を歩く。

内の関係、外の関係の区別については言語学者の間である程度の共通認識となっているが、このような言語事実も存在することから、やはり検討の余地がある問題といえる。

5. 結語

本稿では、日本語の連体修飾を包括的なネットワークとして捉え、これまでは離散的に分析されていた事例をそのネットワーク上に位置づけた。本研究は、先行研究では捉えきれなかった連体修飾構文間の類似性や差異が明らかにできることから、日本語の連体修飾の研究にとって意義深いものである。また、日本語には、解釈者の語用論的な推論によって主要部が修飾部の内部に間接的に位置づけられるタイプの連体修飾構文が存在するが、本稿では、それらの構文には、I. イベント-セッティング型連体修飾構文、II. イベント-原因型連体修飾構文、III. イベント-随伴現象型連体修飾構文という3タイプが多くみられることを示した。今後は4節で述べた問題について検討するほか、談話的側面や、対照言語学的視点、あるいは通時的観点から、より幅広いデータを検討し、包括的な連体修飾の記述、分析をおこなう。

注

1. 本節での議論は、木本幸憲氏（京都大学大学院、日本学術振興会特別研究員）との共同研究で得た知見が反映されている。
2. (A-1) から (C-2) までの記号は、説明の便宜上割り当てた。
3. もちろん談話の流れによっては、(1) のように、「魚」がガ格として修飾部に位置づけられ、「食べる」主体として解釈される場合もある。

(1) この餌はやはり高品質だ。[昨日 ϕ ヲ食べた]魚はとても元気に泳ぎ回っている。

4. 「発話者あるいは聞き手」は認知文法のグラウンディング要素として説明することも可能である。
5. 前者のプロセスとほぼ同時並列的におこなわれていると考えられる。
6. 「活性化領域とプロファイルのずれ」は参照点構造を認知的な基盤として生じる。「活性化領域とプロファイルのずれ」が生じた合成表現では、一方の要素によってプロファイルされた参加者のスキーマ的な特性が参照点（下図の R に対応）となり、その活性化領域がターゲット（az/T に対応）としてもう一方の要素（もっとも左側のサークルに対応）と合成される（Langacker 1993: 33）。図の C は認知主体、D は参照点によって活性化されたドメインにそれぞれ対応する。

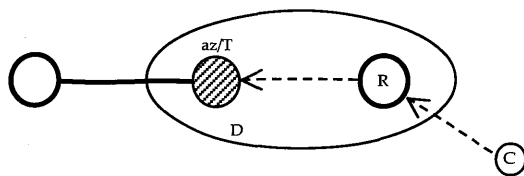


図: 合成表現における参照点構造 (Langacker 1993: 33)

参照点構造や「活性化領域とプロファイルのずれ」に関するさらなる議論は Langacker (1993) を参照。また、「活性化領域とプロファイルのずれ」が連体修飾構文にどのように関わるかについては、Langacker (2008: 331) を参照。

7. この場合の「時間的に同時」とは、イベント A とイベント B の開始時と終了時の同時性を指しているのではなく、イベント A とイベント B が少なくともどこかの時点で平行して生じていることを指す。
8. 本稿であげた例に対応する例文番号が表示してある。

参考文献

- Ariel, Mira. 2008. *Pragmatics and Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, John L. 2003. Cognitive Processes in Grammaticalization. In Tomasello (ed.), *The new Psychology of Language*. Vol.2, 145-167. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Comrie, Bernard. 1981. *Language universals and linguistic typology: syntax and morphology*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Comrie, Bernard. 2002. Typology and Language Acquisition: The Case of Relative Clauses. In Giacalone A. Ramat (ed.), *Typology and Second Language Acquisition*, 19-37. Berlin: Mouton.
- Croft, William and D. Alan Cruse. 2004. *Cognitive linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fox, Barbara A. and Sandra A. Thompson. 1990. A Discourse Explanation of the Grammar of Relative Clauses in English Conversation. *Language* 66: 297-336.
- Keenan, Edward and Bernard Comrie. 1977. Noun Phrase Accessibility Hierarchy and Universal Grammar. *Linguistic Inquiry* 8: 63-99.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference-point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4 (1): 1-38.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

- Matsumoto, Yoshiko. 1997. *Noun-Modifying Constructions in Japanese: A Frame-Semantic Approach*. Amsterdam: John Benjamins.
- Yip, Virginia and Stephen Matthews. 2007. *The Bilingual Child: Early Development and Language Contact*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 深田智. 2004. 「未分化な意味の分化：形容詞における主体／客体関係を中心に」『言語科学論集』10: 117-147. 京都大学 人間・環境学研究科 言語科学講座.
- 堀江薫、プラシャント・パルデシ. 2009. 『言語のタイポロジー：認知類型論のアプローチ』東京：研究社.
- 神澤克徳. 2011. 「日本語の転移修飾への認知的アプローチ」京都大学 人間・環境学研究科 修士論文.
- 木本幸憲. 2011. 「日本語の連体修飾節について-転移修飾の位置付けを中心に-」口頭発表資料.
- 小松原哲太. to appear. 「修辞理解のメカニズムに関する基礎的研究-転義現象の分析を中心に-」京都大学 人間・環境学研究科 修士論文.
- 黒田成幸. 1999. 「主要部内在関係節」, 黒田成幸、中村捷 (編)『言葉の核と周縁』27-103. 東京：くろしお出版.
- 久野暉. 1978. 『談話の文法』東京：大修館書店.
- 松本善子. 1993. 「日本語名詞句修飾構造の語用論的考察」『日本語学』12 巻 12 号: 101-114.
- 松本善子. 2007. 「フレームの統合-日本語の複合名詞句構造」, 久野暉ほか (編)『言語学の諸相』114-154. 東京：くろしお出版.
- 奥津敬一郎. 1974. 『生成日本文法論』東京：大修館書店.
- 寺村秀夫. 1975. 「連体修飾のシンタクスと意味 その 1」『日本語・日本文化』4: 71-119. 大阪外国語大学研究留学生別科.
- 寺村秀夫. 1977a. 「連体修飾のシンタクスと意味 その 2」『日本語・日本文化』5: 29-78. 大阪外国語大学研究留学生別科.
- 寺村秀夫. 1977b. 「連体修飾のシンタクスと意味 その 3」『日本語・日本文化』6: 1-35. 大阪外国語大学研究留学生別科.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』東京：ひつじ書房.
- 吉川千鶴子. 1989. 「日英語省力のメカニズム (1)」『大阪学院大学外国語論集』20: 64-84.